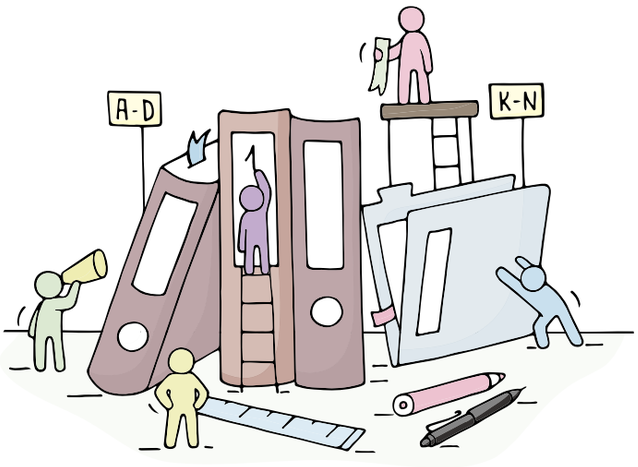
FD・SD Activity Report

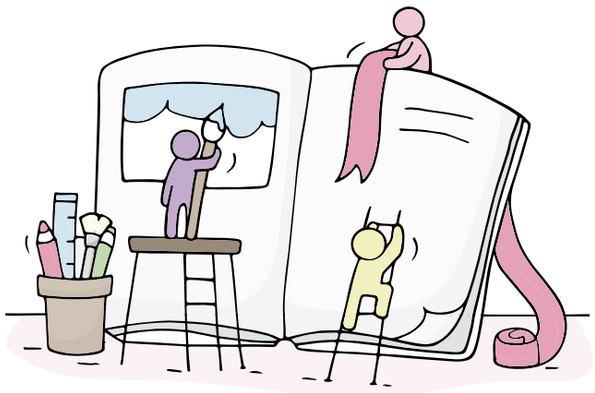
Faculty Development ・ Staff Development

2019・2020

成城大学

はじめに：副学長／FD・SD小委員会委員長ご挨拶
新任教員研修会
授業改善アンケート
ベストティーチャー賞表彰式
ピアチューター制度に係るSD活動報告
FD・SD小委員会共催　認証評価に関する説明会
「大学基準協会による第3期認証評価の変更ポイント
―昨年度の評価結果を踏まえて―」
各学部のFD・SDへの取り組み
2020年度活動計画





学生を懸命にさせる教育をめざして

はじめに

副学長
教育イノベーション委員会FD･SD小委員会委員長
杉本 義行 教授

～“With コロナ”のFD･SD活動～

昨年度(2019年度)のFD･SDにかかる事業は、おかげをもちまして無事に実施することができました。皆様のご協力とご理解に感謝申し上げます。

周知のとおり、本学のFD活動は、①授業改善アンケート、②新任教員研修会、③FD講演会･ワークショップの3つを柱に進められております。本冊子は、主に昨年度のFD･SD活動についてのご報告となりますが、2月後半からの新型コロナウィルス感染拡大のため大学では学校行事をはじめとしてさまざまな対応を余儀なくされました。FD･SD活動もその影響を受け、3月に予定されていたワークショップデザインに関するセミナーが中止となり、加えて、学習成果の測定として重要な卒業生アンケートについても、学位記授与式の中止により郵送方式としたことから、回収率の大幅な減少という事態に至りました。

しかしながら、今述べたようなネガティブな影響もあった一方で、結果として本来のFD活動が展開されたという積極的な側面もあったと考えます。

3月以降を振り返ると、3月初めに前期中の全ての授業科目を遠隔授業で実施することが決定され、オンライン会議システムZoomのアカウントが全教員に対し付与されました。また、4月24日には遠隔授業に関するFDワークショップを、また翌週にはWebClassの講習会を開催し、併せて延べ500名を超える先生方のご参加をいただきました。

また、複数の学部では有志の先生方を中心に遠隔授業についての勉強会やオンライン･チャットツールSlackなどを通じた情報交換が活発に行われたと聞いております。

以前に本学のFD･SDシンポジウムにご登壇された松下佳代教授(京都大学高等教育研究開発推進センター)によれば、京大でのLMSの教員利用率は昨年度の約2割から今年度に入り9割に大幅にアップし、全10回のオンライン授業に関する講習会･相談会には延べ2,600名を超える参加があったと述べられております。松下先生は、FD活動への関心の高まりの理由について、「全学共通の課題に放り込まれ、部局や分野の違いを越えてテーマが共有できた」からだと指摘しています。

こうした動きは、FacebookなどのSNSの利用により、大学を、さらには学校種を越えて広がりをみせました。Facebookでは、オンライン授業に関する意見交換の場を目的とした多くのグループが生まれ、最大のグループでは約2万人弱がメンバーとして登録し、活発な意見交換がいまも続いています。

私自身を含めて多くの教員にとって、対面授業を遠隔授業につくりかえるという初めての経験であることから、ZoomやGoogleドライブの使い方といったデジタルスキルを習得するニーズがFDへの関心の直接的な理由であると思います。それと同時に、授業をつくりかえるプロセスにおいて、対面では当たり前のようにやっていた活動が学生の学びにとってどのような意味を持っているのか。そもそも、それをオンラインでもやる必要があるのか、などといった、授業内容を再考する機会になったことが、FDへの関心を呼び起こしたのではと考えます。

遠隔授業に関するFD･SD活動は、来年刊行の冊子できちんと分析をする必要がありますが、現時点の反省点としては、講習会の回数を含めて教員の方々のニーズを満たしていたのかという点がございます。

コロナ禍は当初の予想に反して想像以上に長引く可能性があると伝えられており、しばらくは“Withコロナ”の状態が想定されます。今後は、鈴木克明先生(日本教育工学会長)が仰る応急的な「止血段階」のオンライン化から、学びの質を一段階、向上させる方向への努力が必要になるものと思います。今後のFD･SD活動は、この点の支援に重きをおく必要があると考えます。全学的な活動はもちろんですが、各学部･研究科のきめ細かいニーズを踏まえた独自のFD活動も必要であります。全学的な活動としては、これらの取り組みを支援しなければなりません。

今後とも、教職員の皆様からのさまざまなご意見やご要望を賜れば幸いです。

2020年11月

新任教員研修会

2019年4月13日(土)に、新任教員研修会を開催しました。本研修会は、新任の先生方に一日でも早く本学をご理解いただき、円滑な教育活動を始めていただくための一助として毎年実施しております。専任教員は13時～17時、非常勤講師は13時30分～16時15分の時間帯で行いました。

専任教員は対象者9名全員(経済学部4名、法学部2名、社会イノベーション学部2名、国際センター1名)、非常勤講師は57名のうち31名の先生方が参加されました。

専任教員・非常勤講師共通スケジュール

内　容	担　当
・研修説明	FD・SD小委員会委員長
・挨　拶	学長
・成城大学の沿革 ・これからの取り組み (第2世紀ビジョン) ・自己点検・評価と認証評価等	学長
・授業に関することについて 学則、学年暦、休講・補講、欠席届、公欠、教室使用・教室変更、機材設置、聴講生・科目等履修生、他学部聴講等 ・Campus Square for Webについて 受講者名簿、成績入力等 ・試験、レポートについて 定期試験、追試、試験施行内容登録等 ・成績について 成績評価・開示 (評価分布含む)・問い合わせ制度等 ・シラバスについて 記載必須事項等 ・授業改善アンケートについて 実施要綱等	教務部
・ハラスメントについて	ハラスメント防止委員会
・特別な支援を必要とする学生について	バリアフリー委員会
・非常時 (火災・地震等) の対応について	企画調整室
学習サポートシステム「Web Class」の操作方法について	教育イノベーションセンター (日本データパシフィック株式会社)
・教育研究用ネットワークとその利用について ・情報関連設備、外国語教育設備、教材作成設備とその利用について ・e-learningツールとその利用について	MNC
・図書館現地視察 図書館の概要・利用方法について、他大学利用状況、ピアサポーター等	図書館

学長による本学の沿革、取り組み等に関する解説

各担当者からの説明の様子

日本データパシフィック株式会社によるWebClassの操作説明

専任教員にプラスした内容

内　容	担　当
・成城学園の建学の精神 ・教育理念等について (DVD)	教育研究所
・教員業績システムについて	総務課
・科学研究費助成事業について ・特別研究助成費について	研究機構事務室

非常勤講師にプラスした内容

内　容	担　当
・非常勤講師控室現地視察 非常勤講師控室の利用方法について等	非常勤講師控室

授業改善アンケート

2019年度は、全学的な授業改善アンケートを大学、大学院の全科目を対象とし、前期、後期の2回実施いたしました。実施状況は大学と大学院を合わせて、実施任意科目も含め、2,690科目中2,271科目（実施率84.4%）でした。

アンケートの集計結果は、Campus Square for WEBで学内公開し、別途、科目別集計表を各科目担当者へ、大学全体集計表、科目開設部門別集計表、授業形態別集計表を学長、学部長、研究科長、共通教育研究センター長、データサイエンス教育研究センター長、国際センター長、キャリアセンター長へ報告いたしました。

また、アンケート集計結果の概要および集計結果に対するコメントは大学ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。

この集計結果を授業改善に役立てたいと考えておりますので、今後とも本アンケートにつきまして、ご協力いただきたくお願いいたします。

2019年度 前期　授業改善アンケート集計結果　　成城大学

対象	大学全体	実施対象科目数(A)+(B)	1,014	実施科目数(C)+(D)	932	延べ履修者数	40,305
		実施必須科目数(A)	670	実施科目数(C)	659	延べ回答者数	26,395
		実施任意科目数(B)	344	実施科目数(D)	273		

設問	項目	平均値	設問1ごとの標準偏差値※1	回答数(人)／回答率(%) 5	4	3	2	1	有効回答数	総履修・総開講数
1	この授業に欠席した回数は次のようである ⑤7回以上 ④6～5回 ③4～3回 ②2～1回 ①0回	4.21	0.02	646	351	3,306	9,422	11,234	24,961	1,434
				2.6	1.4	13.2	37.7	45.0		
2	授業中、この授業の内容を理解するために努力した（ノートをとる等）	3.87	0.39	7,606	9,957	5,023	1,876	670	25,134	1,261
				30.3	39.6	20.0	7.5	2.7		
3	教員は休講や遅刻をすることなく授業を行っていた	4.30	0.39	13,364	8,064	2,783	946	344	25,521	874
				52.4	31.7	10.9	3.7	1.3		
4	教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった	4.17	0.64	11,454	8,881	3,658	1,134	389	25,516	879
				44.9	34.8	14.3	4.4	1.5		
5	この授業のレベルはあなたにとって適切であった	3.97	0.70	8,634	9,739	5,340	1,449	365	25,527	868
				33.8	38.2	20.9	5.7	1.4		
6	教員は教室内が学習にふさわしい状態（私語等対応）に保たれるよう心掛けた	4.23	0.57	11,466	9,471	3,659	700	196	25,521	874
				45.0	37.1	14.3	2.7	0.8		
7	教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した	3.84	0.49	9,255	7,324	5,769	2,028	1,131	25,506	889
				36.3	28.7	22.6	8.0	4.4		
8	シラバスと授業の内容が一致していた	4.27	0.64	11,615	9,701	3,754	316	120	25,506	889
				45.5	38.0	14.7	1.2	0.5		
9	この分野への興味・関心が引き起こされた	4.06	0.84	9,722	9,663	4,652	1,088	471	25,496	899
				38.1	[illegible]	18.2	4.3	1.8		
10	この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった	4.11		10,282	[illegible]	[illegible]	1,020	410	25,493	902
				40.3	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		
11	教員の板書、スライド等は見やすかった	4.02	0.67	9,59[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
				38.0	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		
12	1回分の授業にあたり、授業時間外の事前・事後学習のために費やした平均の時間(h)は次のようである ⑤1.5h以上 ④1～1.5h未満 ③0.5～1h未満 ②0.5h未満 ①ほとんどしていない	2.36	0.20	1,6[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
				6[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		
スポーツ・ウエルネス実技のみ回答										
13	授業で十分に運動することができた	4.77	0.61	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

2019年度 後期　授業改善アンケート集計結果

対象	大学全体	実施対象科目数(A)+(B)	1,510	実施科目数(C)+(D)	1,286	延
		実施必須科目数(A)	871	実施科目数(C)	853	延
		実施任意科目数(B)	639	実施科目数(D)	433	

設問	項目	平均値	設問1ごとの標準偏差値※1	回答数(人)／回答率(%) 5	4	3	2
1	この授業に欠席した回数は次のようである ⑤7回以上 ④6～5回 ③4～3回 ②2～1回 ①0回	4.12	0.03	548	387	4,486	13,131
				1.9	1.3	15.5	45.5
2	授業中、この授業の内容を理解するために努力した（ノートをとる等）	3.88	0.43	8,909	11,594	5,794	2,161
				30.3	39.8	19.9	7.4
3	教員は休講や遅刻をすることなく授業を行っていた	4.27	0.43	14,442	10,235	3,385	1,031
				49.1	34.8	11.5	3.5
4	教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった	4.21	0.65	13,213	10,881	3,903	1,101
				44.9	37.0	13.3	3.7
5	この授業のレベルはあなたにとって適切であった	4.02	0.71	10,243	11,853	5,510	1,4[illegible]
				34.8	40.3	18.7	4.[illegible]
6	教員は教室内が学習にふさわしい状態（私語等対応）に保たれるよう心掛けた	4.25	0.59	13,186	11,432	3,918	7[illegible]
				44.8	38.8	13.3	[illegible]
7	教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した	3.89	0.48	10,931	8,988	6,136	7[illegible]
				37.2	30.5	20.9	[illegible]
8	シラバスと授業の内容が一致していた	4.27	0.65	13,338	11,433	4,148	
				45.3	38.9	14.1	
9	この分野への興味・関心が引き起こされた	4.09	0.85	11,374	11,461	4,965	
				38.6	38.9	16.9	
10	この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった	4.14		11,916	11,516	4,528	
				40.5	39.1	15.4	
11	教員の板書、スライド等は見やすかった	4.05	0.68	11,071	10,815	5,315	
				38.0	37.1	18.2	
12	1回分の授業にあたり、授業時間外の事前・事後学習のために費やした平均の時間(h)は次のようである ⑤1.5h以上 ④1～1.5h未満 ③0.5～1h未満 ②0.5h未満 ①ほとんどしていない	2.40	0.21	2,067	3,144	7,41[illegible]	
				7.3	11.1	26[illegible]	
スポーツ・ウエルネス実技のみ回答							
13	授業で十分に運動することができた	4.80	0.59	247	36		
				84.3	12.3		
14	あなたの身体の健康、体力、生活習慣を見直す機会となった	4.70	0.59	223	53		
				76.4	18.2		

※設問17～22は非表示です。

全体平均

□全体平均

とてもそう思う

そう思う

成城大学　授業改善アンケート

アンケート集計結果はWeb上で公開しております。

ベストティーチャー賞表彰式

「授業改善アンケート」の結果を元に、優れた授業を実践し、教育改革を先導している教員を表彰することで、本学教員の教育意欲向上を図り、併せて大学教育の活性化を図ることを目的とした「ベストティーチャー表彰制度」が2019年度より新設されました。

2019年7月11日(木)に、本学初となる「ベストティーチャー賞表彰式」が行われ、副学長および各学部長立会いのもと、戸部学長よりベストティーチャーに表彰状および副賞が授与されました。

ベストティーチャー賞について

対象者
本学で開講される授業科目(*)を担当する本学専任教員及び非常勤講師を対象とします。
(表彰が行われる年度及びその前年度において、本学で開講される授業科目を担当している者)
(*)ゼミナール、スポーツウエルネス実技科目及び大学院開設科目は対象外

選考
授業改善アンケートの回答率(*)並びに設問の評点を基準に決定します。
(*)授業改善アンケートの回答者数が10名未満または回答率が60%未満の授業科目は対象外。

対象者数
小規模部門1　(10～19名)　5名
小規模部門2　(20～49名)　5名
中規模部門　(50～79名)　3名
大規模部門　(80名以上)　3名

学生・教職員に本制度について周知し、大学全体での教育の活性化につながるよう、表彰式前には学内掲示板にて受賞教員を発表しました。

表彰式後には懇談会が行われ、「授業をする上で大切にしていること」などについて、受賞された先生一人ひとりからお話を伺う時間が設けられました。授業教材やコメントシートで工夫されていること、学生一人ひとりに声がけをしていることなどの他、先生方が共通して述べていたのは、学習者を中心に考え、Playfulを意識して授業作りをされていることでした。

受賞教員に対しては、本学にて開催するFD・SD講演会の講師や「授業カタログ」への登場を依頼することで、大学全体のFDの活性化を目指します。

当日の様子をWeb上で公開しております。

SDへの取り組み

ピアチューター制度に係る SD活動報告

<Supporters' Forum 2019 at Seijo University>

2019年11月30日(土)、他大学との交流の場として本学が主催するサポーターズフォーラムを開催した。今年で3回目となり、17大学および高校4校、総勢約200名が成城大学に集まる大きなイベントとなった。

今年度はポスターセッションとワールドカフェ方式の全体ワークという新しい取り組みを行い、ポスターセッションでは、教室内の各団体の力作ポスターを自由にめぐり、説明者との質疑応答等による交流が行われた。その後のワールドカフェでは、「サポーター経験が社会に出た時にどういかせるか?」という共通テーマをもとに全体で話し合った。他のグループの情報も得ながらグループごとに意見をまとめるなど、大学・校種を超えた学生・生徒間の交流が深まるとともに、多様な価値観に触れ合い、大きな刺激が得られる場となった。回を重ねるにつれて参加者数も増え、サポーターの輪がひろがっている。

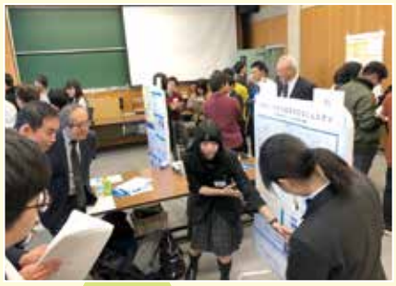
フォーラム全体において、学生・教員・職員同士はもちろん、立場を超えた交流も深めることができ、相互に多様な価値観に触れることで大きな刺激となり、今後の活動にも活用できる多くの知見を得ることができた。

なお、フォーラムの開催に向けては、各サポーター団体の代表学生と各部局の職員とが月に1～2回の打合せを行い、準備を進めてきた。打合せや準備作業においては、職員は学生の意見を尊重しつつ、どのようにしたら学生の主体的な行動を引き出し、また、創造性を発揮させることができるのか試行錯誤しながら学生の支援をさまざまに行ったが、これ自体がSD活動の大きな取り組みともなった。

【サポーターズフォーラムのプログラム】

13:00～13:30	開会挨拶、成城大学のサポーター活動紹介
13:40～15:00	ポスターセッション
15:20～16:20	ワールドカフェ方式の全体ワーク
16:30～17:30	懇親会・閉会挨拶

参加者約200名の全員集合!



高校生も活躍した
ポスターセッション

グループをシャッフルしながらの
全体ワーク

<他大学におけるサポーター活動の訪問調査　～三重大学訪問～>

授業外の取り組みとして、学生が主体となって他の学生を支援するサポーター制度については、多くの大学で導入されているが、その中でも三重大学は先進的で優れた取り組みを行っている大学である。2019年12月16日(月)、副学長及び教育イノベーションセンター職員、キャリアセンター職員の総勢5名で訪問調査を行い、サポーター活動の取り組みについて伺ったことを報告する。

三重大学においては、副学長・学生総合支援センター長、学生総合支援センター教員、就職支援課長、学生なんでも相談室長、現役ピアサポーター学生の総勢5名にご対応いただいた。

まず、三重大学の教育目標の実現に向けた「学生支援の基本方針」がしっかりと設定されたうえで明示・公表されており、本方針の中の「学生自身の活動を通じた学生支援」という項目において、ピア・サポート活動の活性化や充実について明記されていた点が印象的であった。ピアサポーターが発足した経緯としては、2010年にキャリア教育を導入する際、一定のキャリア教育科目の単位を修得した学生に対し「キャリアピアサポーター」という名称の学内資格を認定するしくみを整えたことが始まりである。活動内容としては、通期の修学支援に加え、新入生向けの「春のなんでも相談活動」、就職内定者による「就職相談会」等、多岐にわたっている。これらの活動は教職学協働で行われており、教職員のかかわり方については、学生総合支援センターの常勤職が学生サポーターの支援を行い、当センターの横にピアサポートルームを配置することで、日常的な交流も含めて柔軟な交流を行っているとのことであった。こうした手厚い支援によって築かれた信頼関係をもとに成り立っている背景もあり、ピアサポーターの活動内容は、学生生活を送る中で学生たちが自ら考え・企画し、教職員に相談・提案した後、相互に検討の場を設けて企画を実施しており、これらの活動が学生の育成やSDの機会として有効に機能していることも分かった。

【ピアサポートルーム内部】

【ピアサポーターのユニフォーム】

大学基準協会認証評価に関する説明会

大学基準協会による第３期認証評価の変更ポイント

ー昨年度の評価結果を踏まえてー

講　師　松坂 顕範氏（大学基準協会 評価研究部 企画・調査研究課）

日　時　2019年12月3日（火） 午後6時～7時30分

学校教育法改正に伴い、2004年以降わが国の大学は、大学の理念・目標に照らし、その教育研究、大学全体の組織体としての状況について、7年以内の周期で認証評価機関による評価を受けることが義務付けられています。これを認証評価制度と呼び、制度の目的は、大学が社会による評価を受けること・評価結果を踏まえて大学が自ら改善することを促すことを通じて、大学の教育研究水準の向上に資することとしています。

本学は2015年度、公益財団法人大学基準協会による機関別認証評価（大学評価）を受け、同協会の大学基準に適合していると認定されました。認定期間は、2016年4月1日から2023年3月31日までの7年間となります。

2018年度からは、内部質保証の実質化を一層重視する第3期認証評価が始まり、学習成果の可視化や内部質保証の有効性に重点が置かれるとともに、受審した各大学に対し、多くの改善事項が付されました。

講師の松坂氏からは、内部質保証とは、単純に「自己点検・評価」とイコールではなく、教育の充実と学習成果の向上を主な目的としたものであること、昨年度の大学評価の結果から見える具体的な他大学の取り組み事例、「全学的観点」からの点検・評価報告書の作り方等について、丁寧にご説明いただきました。

当日の参加者は55名（内訳は下表参照）となり、活発な質疑応答が行われ、盛会の内に終了しました。

FD・SD 講演会参加者内訳

所　属		人　数
学内	大学教員	33 名
	職員	22 名
	計	55 名

共通教育研究センター

共通教育研究センターの場合は

共通教育研究センター長
有田 英也 教授

ファカルティ・ディヴェロップメントとスタッフ・ディヴェロップメント。「スタッフ」とは誰でしょう。「職員」です。では、職員とは誰?そこは「事務職員のほか、教授等の教員、学長等の大学執行部、技術職員等も含まれる」。これは一部改正された大学設置基準(昭和31年文部省令第28号)による定義です。大学に関わる人々のうち、学生と保護者を除いたほぼすべてがスタッフとして、職能開発に勤しむべきであり、大学執行部は必要な研修を施すべく手間と費用を惜しんではならない、ということでしょう。私の働くところが大学でよかった。もしそこが製造販売なら、スタッフすべてに職能開発だけでなく、コスト低減が求められたでしょうから。

本稿では、2019年度に実施されたFD・SDへの取り組みを振り返りながら、「スタッフ」以外の人々から受けた刺激について語ります。なぜなら、それは私たち成城大学スタッフが自分たちの能力をどのように維持し、伸ばしてゆけばよいかという切実な問いに関わっているからです。2019年12月14日(土)に開催された第11回WRDプレゼンテーションコンテストで「スタッフ」以外と言うのは、司会・進行から、タイムキーピング、マイク回し、録画まで担当してくれた学生たちであり、審査員を勤めてくださった成城学園中学高等学校の青柳圭子教諭と松田美穂教諭、そして吹奏楽部が研究対象という特異な教育学者、田口裕介先生のような言わば外の眼をお持ちの先生のことです。そして、2020年2月26日(水)開催のWRD研究会(公開FDワークショップ2019)では、講師の石原千秋先生(早稲田大学教育・総合科学学術院教授)をはじめ創価大学など他大から、同業者の皆さんが参加してくださいました。テーマは「受験国語は敵か味方か---個性を作るには?」です。

二つの取り組みは、ともにWRDという成城大学独自の初年次リテラシー科目のFD活動の一環です。WRDとはライティング、リーディング、そしてディスカッションもしくはディベートの頭文字をならべた科目名ですが、もちろん初年次リテラシー科目の担当教員に必要な職能は、これらの技術を新入生に授ける力だけではありません。いや、今年度の大学を覆うコロナ禍と急激なオンライン授業への移行によって私たちスタッフが実感したのは、教育の主眼が「知識を授ける」ことから「学びを助ける」ことへと変わりつつある事実でした。共通教育研究センターの二つの取り組みは、この変化をずっと前から先取りしており、しかし残念なことに、取り組みが具体的行動に繋がり得ていなかったのではないか、という苦い実感も伴いました。

さて、WRD研究会は『成城大学共通教育論集』第13号に石原先生の講演と、司会の共通教育研究センター長との討論が収録されるので、本稿ではプレゼンテーションコンテストを紹介します。このイベントは、共通テーマを掲げていますが、2019年度は「広い(広がる・広げる)」で、そこからWRDのクラスを核としたチームが自由にテーマ設定をしてプレゼンを行い、審査員によるジャッジを待ちます。今回の発表テーマは、「食の多様性～食の自由を広めよう」「情報が広がる---SNS上におけるステルスマーケティング」「スタンリー・キューブリックと一点透視図法から見る映画における空間の広がり」「日本でキャッシュレスを広げよう」「2019年<香港デモ>における権力と民衆の対立---暴力はいかに<広がり>、いかに阻めるのか」「情報拡散における画像メディアの有用性」と、社会性に富むものでした。発表者は5人から20人近くまでとさまざまです。最前列で聞いていると、共同作業の準備に差があるようでしたし、担当教員による檄の飛ばし方や直前のミーティングなど野球強豪校を思わせる所作もあって、参加した学生たちはそれぞれに嬉しさ、悔しさを感じたことでしょう。「コンテスト」という競合的形式、また「ベストリプライ賞」に学生2名が輝いたことから分かるように、ギャラリーから飛んでくる質問の矢を捌く力も問われたからです。大学8号館008教室は、しばしアリーナ(闘技場)でした。ディヴェロップメントはトレーニングに似ている、と痛感した次第です。

各学部のFD・SDへの取り組み2

社会イノベーション学部

社会イノベーション学部の遠隔授業に向けた取り組み

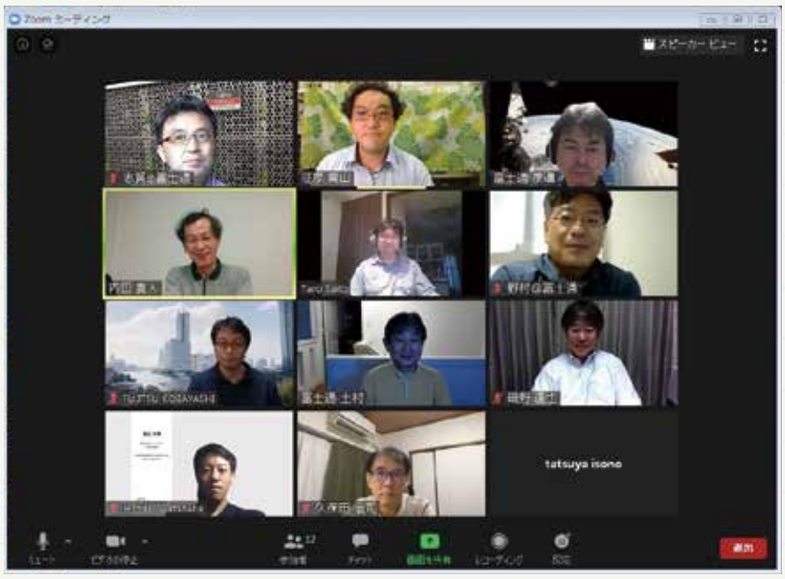
社会イノベーション学部
青山 征彦 教授

新型コロナウイルスによる感染症が、社会の広い範囲に甚大な影響をもたらしている。このことは大学においても例外ではなく、2020年は、わが国の大学教育に遠隔授業が急速に普及した年として記憶されることになるだろう。FDやSDといった活動は、本来は教育組織における定常的な活動として行われるべきものであると思うが、この数ヶ月の状況においては定常的な活動はそもそも不可能に近かったのは言うまでもない。

こうした困難な状況に対応すべく、社会イノベーション学部は、いくつかの新しい試みに取り組んできた。その過程で、教員同士が情報を共有しあいながら、遠隔での教育方法についてさまざまなノウハウを蓄積したことは、定常的な活動ではないものの、FD活動としての側面を十分に有していたように思われる。そこで本稿では、社会イノベーション学部がどのように新しい試みに取り組んできたのかを振り返ってみたい。

私たちが最初に取り組んだのは、年度当初のガイダンスをどうするかという問題であった。3月中旬に行われた教授会の時点では、対面でのガイダンスを予定していたが、すでに見通しが甘いのではないかという意見が少数ながらあった。その後、急速に状況が悪化していくなか、対面でのガイダンスを工夫して行なったとしても、学生や教職員に危険が及ぶ可能性は避けられないと考えて、ガイダンスを動画による配信に切り替えることを決断した。メールを見返すと、3月18日から内容の検討を始め、3月27日には322教室で撮影を行っている。3月31日には、WebClassに動画のリンクを掲載しているので、ほぼ2週間というスピードで対応したことになる。

ただし、このガイダンス動画（下の写真）は、画面が暗いという問題があった。撮影には、教室に備えつけられている録画装置を用いたのだが、簡単に撮影ができた反面、スライドをスクリーンに映すために教室の照明を暗くする必要があり、そのために画面が暗くなってしまったのである。そこで、次に制作した2年次のガイダンスでは、教室での撮影システムを用いず、ビデオカメラで撮影した映像と、PowerPointのビデオナレーションによる映像を編集して用いた。この時点でも撮影用の照明などをまだ入手できておらず、映像として良い品質だったとは言えないが、こちらも4月16日にはリリースすることができた。これらのガイダンス動画の制作を通じて、さまざまな方法で動画を作成できることや、そのために



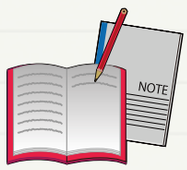
どのような準備が必要かを把握できたことは、その後の遠隔授業に大いに役立ったように思う。

次に私たちが直面したのは、実際に遠隔授業をどのように運営するかという問題であった。4月4日に当面の授業を遠隔実施することが決まり、ついで4月21日には、前期の全授業を遠隔実施とすることが発表された。こうした動きに、教員の間には動揺が広まった。一部の教員は、すでに教員同士の情報交換の場を構築するなどしていたが、情報通信技術に明るくない教員を中心に、不安が高まっていた。

そこで、遠隔授業についてのノウハウを共有するような場が作れないかと考え、有志によってGoogle Chatを用いたチャットグループが4月25日に開設された。チャットグループには学部の専任教員が参加し、遠隔授業での出席の取り方やZoomの設定の仕方、他大学のLMS（学習支援システム）の運用状況や、各種マニュアルの共有など、さまざまなメッセージが飛び交った。こうした情報共有は遠隔授業の準備に大いに役立った。実際に遠隔授業が開始してから、社会イノベーション学部の授業が比較的スムーズにスタートできたのは、このチャットグループの貢献が少なからずあるように思われる。

とはいえ、私たちの挑戦は、まだ始まったばかりと言わざるを得ないだろう。ここでは、遠隔授業の可能性を感じることができた授業実践として、社会イノベーション特殊演習での取り組みを報告しておきたい。社会イノベーション特殊演習は、富士通のエンジニアや、ベンチャー企業を立ち上げた学部の卒業生が社会人講師として授業をリードするPBL型の授業であり、グループワークやプレゼンテーションが多く採り入れられていたため、遠隔での実施は困難と思われた。しかし、Zoomを用いた授業は、チャットで活発に議論したり、ブレイクアウトルームを活用してグループワークを行ったりすることを可能にした。画面共有によるプレゼンテーションもスムーズに行えた。さらに、普段なら来学できないような企業人が遠隔で参加するなど、例年以上の成果もあった（上の写真）。工夫すれば、遠隔であっても充実した授業ができるという確信が得られたと言って過言ではない。

後期になって、部分的に対面授業を再開するようになったが、これからは対面授業に遠隔授業を組み合わせたハイブリッド型の授業をどのように作り上げていくかが課題になる。先日行われたオープンキャンパス・オンラインでは、本学部の企画で「アフターコロナとイノベーション」というミニ講義を公開したが、その中で遠藤教授は、対面での授業と遠隔での授業という反対方向への動きを両立させるような「新たなベストミックス」を探し出すことが、アフターコロナのポイントであると指摘している。対面授業と遠隔授業の手法をいかにミックスして、新しい教育のあり方を考えていくこと、それこそがイノベーションという名前を冠した学部として、私たちが今後、取り組むべき課題だと考えている。



「授業カタログ」を刊行しました!

FD活動における制度的な取り組みの一環として、「授業改善アンケート」において高い評価を得ている先生方へのヒアリングをもとに、優れた取り組みや授業方法の共有を図ることを目的に、「授業カタログ」を刊行しています。2019年度に創設されたベストティーチャー賞において、受賞者の中から3名の先生にもご登場いただきました。実際の授業を取材し(2019年度は実地調査にも同行させていただきました)、先生方の授業改善の工夫、実際に受講した学生の声を、冊子として「見える化」することで、大学全体の授業改善や効果的な履修指導へつながれば幸いに存じます。

今後の冊子作成の際も、先生方におかれましては、授業の取材・撮影のご協力をお願いいたします。

掲載内容を大学HPで公開しております。ぜひご覧ください。

2020年度活動計画

- 2020年 4月 ● 新任教員研修会
- 2020年 7月 ● ベストティーチャー賞表彰式
- ● 前期授業改善アンケートの実施
- 2020年 9月 ● 2019年度授業改善アンケート集計結果報告、公開
- ● 前期授業改善アンケート集計結果報告、公開
- 2020年11月 ● 成城大学FD・SD Activity Report 2019・2020年度版発行
- 2020年12月 ● 後期授業改善アンケートの実施
- 2021年 3月 ● 2021年度事業計画、予算概算要求書確定
- ● 授業カタログ発行

※1　時期が未定の事業
・FD・SDにかかる研修会参加、他大視察
・FD・SD講演会・ワークショップ
※2　事情により、上記の予定が変更になる場合があります。

成城大学教育イノベーション委員会FD・SD小委員会委員 (2020.5.11現在)

委員長　杉本義行 (教育イノベーション委員会委員長)

委　員　杉本義行 (教育イノベーションセンター長)
大津　武 (教務部長)
平野　創 (経済学部)
高名康文 (文芸学部・文学研究科)
新山一雄 (法学部)
青山征彦 (社会イノベーション学部)
花井清人 (経済学研究科)
松田　浩 (法学研究科)
村田光二 (社会イノベーション研究科)
大友浩一 (事務局長)

発行日　2020年11月
成城大学教育イノベーション委員会 FD・SD 小委員会